
プリンスのお茶菓子

ふくふく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンスのお茶菓子

【Nコード】

N6897X

【作者名】

ふくふく

【あらすじ】

好きな人はいるけど、自分の恋愛に対して現実感と自信の持てない平凡な女子大生と、プリンスと呼ばれているけど普通の男子大学生のかみ合わない日常生活、ときどきラブコメ。

プリンスとお茶菓子

小宇治崇君。あだ名はプリンス。苗字がおうじだから、それだけの理由。でもこれは私と私の友達のゆかりちゃんとの間の呼び名であって、小宇治君を直接プリンスなんて呼ぶ人は、いない。でもそれでいい。彼は私だけのプリンスだから。

小宇治君は二十歳の大学2年生。某有名大学の工学部工学科。研究室は・・・よくわかんない。調査はしたけれど、他学部の研究室の制度と違っていまいちピンとこない。

出身高校は隣県の有名進学校で、その特進コース数学科に在籍していた。その中でも成績はトップクラス。そのためすんなり全国的にも有名な某国立大学工学部に進学した。

現在、キャンパス近くの賃貸マンションで一人暮らし中。バイトは週4で深夜のコンビニ勤務。週2で高校生の家庭教師をしているらしい。家庭教師先はもちろん男子だから、女子高生のコミュめに狙われる心配もない。

小宇治君の容姿はこれといった特徴はない。が、私個人としては、細身のパンツがとてもよく似合っつててよろしいと思ひマス。そのしゅっとした腰のラインがサイコー！時々おしゃれにベストなんか合わせているが、それもまたバーテンダーのようでよくお似合いです。ちなみに身長は175cm。日本人の平均くらいなんだろう？

サークル活動は特に積極的には行っていないようだ。

ゆるいフットサルサークルに在籍しているらしいが、学祭シーズンに模擬店をだすときと、月2・3回ゆるゆる試合に参加するくらい。フットサルも決して上手ではない。足は速いけど見ててもわかるくらい不器用で、ボールに扱われているようなもんだ。

そつえば高校の時もあんまりスポーツは得意ではなかったみた

いだ。何度も言うが、足は速いから運動音痴ではない。運動音痴とは走ればどん尻、球技をすれば突き指をしたりボールに躓いて転んだり、創作ダンスをさせればリズム感最悪・・・という私のような女のことを言うのだ。小宇治君は断じて運動音痴ではない。

歴代の彼女は・・・歴代・・・。これだけは、このことを語るときだけは、私の胸にはむなしさが去来する。私がいかに砂をかむ思いで彼女たちを見つめていたのかは、これまでの語り口調により想像できるだろう。

初めての彼女は、高校2年生の時だった。だが、これはたぶん大人の付き合いにまでは至らず袂を分かったはずだ。

次が大学に入っすぐ。初めての合コンで知り合った尻軽女。たぶんこ奴がわが小宇治君のチェリーを奪い去ったのだろう。いつ頃かは分からないが、付き合い始めて3カ月目には分れたので、けっこうな急展開でABCを済ませたものと思われる。

一番最近が半年前。バイト先のコンビ二で逆ナンパされた社会人年増のくせにいたいけな19歳の男の子をだましていることで良心がとがめたのか2か月前に連絡不通で別れたらしい。（ま、素直に考えれば小宇治君がふられたのだろうが。）

というわけで、現在小宇治君はフリー。拍手喝采。ありがとう。と言って私が小宇治君に告白することはない。それだけはない。彼は私だけのプリンスなのだ。その彼を私自身がけがしていいわけがないのだ。

「だからさー。なんでグリコちゃんはそんなにプリンスのことをストーリーカーじみてすきなくせに、告白しないの？」

このもつともな意見を目の前で述べているのが、上田ゆかりちゃん。私の高校時代からの友人だ。学部は違うがバイト先は一緒。でもバイトの曜日や時間は違うから放課後も講義もほとんど一緒にはいない。お昼休みにだけ、約束したわけでもないのに学食でこうし

て会って話をする。2限3限が休講でもお昼にはこうして律儀に学食に来ることもある。約束のない約束なのだ。

ちなみにグリコちゃんとは私のあだ名だ。苗字が江崎なので、有名菓子メーカーから拝借した。この呼び名を使うのは目の前のゆかりちゃんくらいだが。ほかの友達は「江崎さん」か「江崎」。親しくなっても「えざきん」か「えざちゃん」。黒タイツの芸人ではない。

「プリンスは下々のお菓子になど興味が無いからです」

と、いつも返している言葉でかわす。小宇治君の隣に並ぶ自分なんて、全然全く想像できないから仕方ない。

「いつもそういうけどさ。プリンスだってグリコちゃんのこと別に嫌ってないんだし。高校のころはよく話してたじゃん」

高校のころというのは、私とゆかりちゃんと小宇治君は実は同じ高校出身だからだ。しかも同じ特進コース数学科。1クラスしかないので3年間一緒だった。3年も一緒にいれば、少しくらい話す。さらに同じ大学に進学したのが3人だけだったので、ちょっとした連帯意識さえ持たれていると思う。学内で見かければ会釈くらいするし、そのとき暇ならばほんのちよつとだけ話しかけてくれたりする。「次何の講義?」「環境社会学」「それ前期に取ってたからテスト問題やろうか?」「ありがとっ」くらいは。

「それって、そのまま攻めれば十分脈ありなんじゃないの?私プリンスとそんな話しないよ」

ゆかりちゃんはそういうが、それは女子力の違いだろう。私は平凡凡、よくて十人並み、悪く言えばいくらでもいいようはあるが不快感をさらす必要もないので割愛。ダサくはないがおしゃれさんでもなく、目立たないその他大勢の女の子の一人でしかない。

かたや目の前におわする上田ゆかり嬢は、一言でいえば超絶美少女なのだ。高校の時から仲良くしてくれているが、なんで私ごとき

と仲良くしてくれるのか分からない。クラスメートが男子が多かったから、少ない女子の中で気があったのが私、というのが理由らしいが、それ以外に「グリコちゃんのキャラクターが面白いからね」と謎発言も残している。私が面白かったら、世界は爆笑で満ちている。美人は変わり者が多いというから、そういうことかと納得しているが。

平凡な女の子と超絶美少女だったら、普通レベルの男子代表のような小宇治君はにとっては、平凡な女の子の方が話しかけやすい、ということだろう。平凡さは親しみやすさだ。だからと言って、親しみやすさは好意ではないのが悩ましいところなのかもしれないけど。

「まあグリコちゃんがいいならどうこうしろとは言わないけどね」
今までけっこうな回数、告白しろ、泣き落とせ、しなだれかかれ、奥の手は一服盛って既成事実という手もあるぞ、とけしかけておきながら今更ではないでしょうかゆかり様。

「で、明日の合コンは来るんだよね？」

うつ・・・。

「来るよね？もう人数合わせてるんだから、不参加はなしだよ。6時に八坂駅の東改札だから。」

「バイトが・・・」

「明日はバイトないのは分かってるのよ。おんなじ店なんだから、ごまかし利きませうん。店長にもよくよく休みお願いしたんだから」

「やはり休み希望出したのゆかりちゃんか・・・」

「グリコちゃんがプリンスを好きなのは知ってるけど、漫画のヒーローに対する好きみたいなのもんなんでしょ？最近やっとなわかってきた。だから、現実の男にも目を向けなよ。大丈夫、嫌なら一緒に一次会で帰るから」

ゆかりちゃんはそういうとスूपだけになったうどんぶりの載ったトレイを持って立ち上がった。じゃあねー、と手を挙げて別

れる。私は3限目は休講だからのんびりしたもんだ。

学食の薄いお茶を飲みながら、ゆかりちゃんに最後に言われた言葉を否定する。

漫画のヒーローに対する好きだけじゃないんだけどね。

ちゃんと現実の人物として好きなんだけどね。

つまり少なからず肉欲を持った好きなんだけどね。

否定の言葉を心の中では呟くけど、それをゆかりちゃんに言うつもりはない。

小宇治君への気持ちは自分でもよくわからないくらい大事だ。小宇治君も大事だ。自分を卑下するわけではないけど、どうしても自分分は小宇治君には似合わない気がするのだ。これはもう一種のすり込みみたいなもんかもしれない。

しかし、弱った。合コンかあ。

カラオケとに行くのかなあ……。私は運動音痴だし、リズム感ないし……。歌も下手なのである。

お茶菓子の失態

グリコなる一粒300メートルのパワーを秘めた庶民派キャラメルのあだ名を持つ私が、プリンスこと小宇治崇君に恋をしているのは、前回ストーリーカー気味の情報収集癖とともに暴露したが。

これはどういう状況なのだろう。

小宇治君と私が同衾しているのだ。

しかもキャミソール一枚にパンツ一丁。小宇治君に至っては上半身裸。下半身は恐ろしくて見れない。

いや、この状況は分かっている。どう見てもどう考えても朝チュンというやつだ。

ただどなにゆえそんなものが私に降りかかっているのが理解不能。一生縁ないものだと思っていたのに。現実には小説より奇なり。これはこういふときに使う言葉だったのか。今理解した、100%理解した。だから早くこの状況から逃がしてください、アーメン。

目を閉じて祈ってから、再び目を開ける。しかしそこはやはり見なれた6畳のワンルームなマイルームではなく、明らかに他人の部屋。シックな黒の内装や置いてある洋服、雑誌なんかを鑑みれば若い男性の部屋。

そしてやはり、小宇治君がとなりで上半身裸（下半身不明）で寝ている状況も同じなのだ。

えらいこっちゃ。私はベッドの下にきちんと畳んで置いてある自分の服を大急ぎで着る。なんでこんなにきれいに畳んでいるのか。泣けてくる。

これは確実に私が畳んだ。シャツやスカートの畳み方が私スタイルだ。救いは下着の上下がちゃんとお揃いで、しかもキャミソールまでお揃いの一番お気に入りの下着を付けていたことか。でもそもその中身が貧相なものなのでどうしようもない。

私ごときを手籠めにした男性がいるとは思わなかったので、齡二十歳であるがいまいちそういう危機感がなかった。まさか小宇治君がそれになってしまつとは。世紀末は終わったけど、平成の大人況。デフレスパイラル。ついに世も末ということだろうか。私は靴下を履きながら世界の終末の予感を感じ、一瞬だけ神に祈った。私が老衰で死ぬまで、たぶん後60年くらいは、世界を滅ぼさないでください、アーメン。

バッグを取つて、忘れ物がないかあたりを見回す。よし、ない。あとは逃げるのみ。

私が出てしまえば鍵は空いたままだが、悪い、そこまで責任持てぬ。大急ぎで靴を履き、部屋から出るべくドアノブを回してドアを薄く開けた。ところで。

「やり逃げするんだー？」

後方から声がかかる。嫌な汗が背中を伝う。

ゆっくり振り向くと、トランクス一枚の小宇治崇君が私を見ていた。

下半身は裸ではなかったんですね。良かった。（でもちよつとその中身覗きたい気がします。本心）

プリンスの告白

やり逃げなんて不名誉極まりない。やらず逃げと言ってほしい。
が、この状況はどう見ても「やった」んでしょうか。そういえば
体の奥がなんだか違和感。

「まさか昨日のこと覚えてなとは言わないよね」

小宇治君が笑っている。小宇治君は、さすがにトランクス一枚は
肌寒かったのか、ブラックデニムのパンツと長袖Tシャツを着て、
ベッドに腰掛け私を見ている。そりゃそうですよね。現在11月で
すもの。私もちよつと肌寒くて起きました。

私は小宇治君の正面、ローテーブルをはさんだ床に座り小さくな
っていた。

いや、覚えていない・・・わけではない。さっきは混乱していて
記憶も何もぶっ飛んでいたが、現在はつきりと昨夜のあれこれを回
想できるし、起きぬけで化粧も落ちたすっぴんよりもひどい顔をさ
らしている羞恥心もむくむくと大きくなってきている。とりあえず
顔洗っていいですか？そしてスキンケアと化粧しに帰っていいです
か？

小宇治君にびくびくしながら聞いてみたら、顔を洗うのは許して
くれたけど、帰宅は許してくれなかった。

そりゃそうだ。帰宅させてくれればそのままトンずらくのは目
に見えている。高校生の時から頭良かったもんなあ！さすがの読み
だよ！！もうやけくそだ。

とりあえず、顔を洗った。化粧水など男性の一人暮らしではない
ですよねと聞くと、

「使いかけでいいならあるよ」

と言つて有名化粧品メーカーのロゴの入った小瓶を渡された。

へー、モトカノのですか。ほー。まあいいんですけどね、とちよっぱり湿った視線で小宇治君を見るとにやりと笑われた。

化粧水（しかも私の愛用品よりちよっと高いラインのやつだ、チクショウ）をつけただけでファウンデーションもチークも眉さえも整えられない状況で、わがプリンスの御前に姿をさらすが仕方ない。私は覚悟を決めて、小宇治君の元に戻った。

時間は昨夜の午前0時過ぎにさかのぼる。私は合コンを終えて帰宅途中だった。

八坂駅前是我们たちが通う大学から一番近くの繁華街になっており、学生やサラリーマン向けの居酒屋が多い。

昨日の合コンの女子の参加者は私、ゆかりちゃん、ゆかりちゃんの学科の友達2人。男子側はゆかりちゃんの学科の友達のバイト先の人とその友達3人。友達の友達同士でオトモダチになりましたよ。つてとこか。

合コン自体はまずまずの盛り上がりだった。はじめは男の子は4人が4人ともあわよくばゆかりちゃんとお近づきになりたいオーラを出していたが、そのうちに2人はゆかりちゃんの学科の女の子たちと盛りあがり始めた。私とゆかりちゃんもちよっと頑張つて乗りよくして、なかなか楽しかった。

二次会のカラオケも行つた。音痴の私には苦行に近い時間だったが、笑える程度の音痴なので笑ってくださいと先に宣言しておいたのが良かったらしく、まずまずウケた。

次どうするー？と聞かれたが、私とゆかりちゃんは帰ることにした。旨幹事の女の子にいうと、とくに問題なく解散になった。解散前にみんなでアドレス交換して「また遊ばーねー」と社交辞令を言いあい（実際に後日、また同じメンバーで合コンすることなんかあるんだろうか？）八坂駅で別れた。ゆかりちゃんと私は同じ沿線の隣

駅なので一緒に電車に乗ったが、ゆかりちゃんの最寄り駅で別れた。

私はアルコールに強くもないが、それほど酔っておらず、楽しかったな。案外合コンもいいもんだな。と思いながら、最寄駅で降りると改札を通ってそのまま駅前のコンビニに寄った。

最寄駅からは5分ほど歩けば私のマンションにつく。電灯もあり、週末の午前0時はけっこう人通りも多い。最寄駅は普通電車しか止まらないから、駅徒歩5分なんて条件の割に安い家賃でマンションを借りられた。やはり親のすねをかじってる身としては、そういうところもありがたいと思う。

駅前のコンビニで酔い覚ましの野菜ジュースでも買って帰ろうと思っていたら、小宇治君に会ったのだ。小宇治君ちは私のマンション側とは線路を挟んで反対側にある。最寄駅が一緒なもの、小宇治君の家も知っていたが（もちろんストーカー級の情報収集癖による。ただしあえて近所に部屋を借りたわけではない。偶然、たまたまだ。それで一生の運は使い果たしたに違いない）、出くわすのはこの2年で初めてかもしれない。

「こんな夜中に女一人で危ないぞ」

とか小宇治君は言ったと思う。小宇治君はバイト終わりで（小宇治君のバイト先のコンビニは大学最寄のところでここではない）、家に帰る前にコンビニに寄ったらしい。二三言葉を交わして帰ろうと思っていたのに、小宇治君と一緒に飲もうと言ってきて面食らった。さすがに少しは会話する仲だが、ふたりで飲みなんて行ったことない。しかも深夜0時過ぎである。普段の私なら絶対断った。が、昨夜はなぜだか断らなかった。あれがアルコールパワーというやつなのか。自分では酔ってないつもりだったけど、大分酔っていたに違いない。

普通電車しか止まらない小さな駅だが、いちおう駅前なので居酒屋チェーン店程度はある。そこに入って、ふたりでカウンターに並んで座った。私は小宇治君の隣に座っているという状況で緊張して

いた。小宇治君がバイト終わりでビールをぐいぐい行くのを見ると自分も一緒にぐいぐい行ってしまった。

小宇治君は何気ないことを話していた。今日バイト先のコンビニに来た変なお客の話とか、大学構内で見かけた野良猫の話とか。私はそれらが、素面の時に聞いてもまったく面白い話ではないことも理解できず、たくさん笑ってたくさん飲んだ。ビールのジョッキのほか、きれいな色のカクテルとか小宇治君お勧めの一杯とか。

そんな風に飲んでいたら店に入って1時間と経たないうちに私は酔っぱらった。それはもう今まで史上最高に酔っぱらった。私は酔っぱらい過ぎてはいたが、気持ち悪いとかではなく足元がふわふわしてとても楽しく気分だった。たぶん3センチくらい浮いていたのかもしれない。

そのうちに小宇治君の言葉の意味もだんだん分からなくなっていく。にこにこ馬鹿みたいに笑ってたと思う。

小宇治君は帰ろうかと、二人分の代金を店員のお兄ちゃんに支払うと、足元のおぼつかない私を支えながら外に出た。

「一人じゃ帰れないよなあ。かといっておれも江崎の家知らないし」

小宇治君はわざとらしくそういうと、小宇治君の家の方向に歩き始めた。

「私思うんですが、小宇治君の方が確信犯だったんじゃないでしょうか？」

床に正座していたらクッションを貸してくれたので、その上に正座して私が言う。すると小宇治君は、

「ばれたか——」

とさわやかに笑う。笑ってる場合なのか。酔った女の子を密室に連れて行き手籠めにするなんて、犯罪だぞ。

「でも江崎もいって言ったし。気持ちよさそうだったし」

「じゃあじゃあと言う。昨夜のことを持ち出すのはやめてください。」

恥ずかしくて死にそうだ。

「コンビニで会ったのは偶然なんだよ。でも江崎酔ってるっぽかったし、これはチャンスかなと思って」

ちゃんす？チャンスですと？！

「えっと、それは・・・小宇治君が私とやってみたかった、という風に聞こえるんですが」

「女の子がやるとかやらないとか言わないっ！」

小宇治君が身を乗り出し私にデコピンをした。けっこう痛い。

「やるやらないは別として・・・一緒に酒飲んだりくだらない話したりしたかったんだよ」

小宇治君がベッドから降りて、私の真向かいに座る。

私はしばし考えた。一緒にお酒飲んだり、くだらない話がしたい？

前の彼女さんと別れて2か月。現在独り身にはちよつと辛い季節11月。そして（たぶん）禁欲生活も2カ月以上。導き出される結論は。

「人恋しかった、っていうこと？」

別に私が良かったわけではない。同年代の女の子とちよつと話して、心を温めてくれるのならば誰でもよかったのだ。さらにお酒の力で身も一緒に温まってしまった。昨夜のやつちまった出来事はほんとにタナボタみたいなもんだったんだ、お互いに。

ということは、小宇治君としては私が先にそつと帰った方が都合がよかったんではないでしょうか？

なぜに止めた！

私だって次に大学構内で再会した時にはちよつと照れ臭いが、昨夜のことはなかったことにして挨拶するくらいの風流さは持っている！

「違うよ！ってか、なんで前の彼女のこと知ってるの？」

そこは聞かないでください。ストーリーがばれます。小宇治君の

ことを「手籠めにして！」なんて犯罪者扱いしていたが、私の方が犯罪歴は長いわけだ。

「江崎のこと高校の時から気になってたんだよ。江崎ってほかの女の子とはちよつと違う雰囲気持ってたから。でも最後の一步近づけてくれない感じのバリアを感じてたから、近寄れなくなつて・・・昨夜は酒のおかげかそのバリアが溶けてたから。」

バリアなんて張つた覚えないけどな。

「だからって昨夜のうちに部屋にまで連れ込む気はなかったんだけどね。でも連れ込んでみたら・・・江崎が洋服脱ぎだして。もうそこまでされたら、おれ無理でした」

そういえば、私は寝るときは下着だけで寝る癖がある。パジャマでもジャージでも締め付け感がいやなのだ。だからよっぽど寒くない限り寝るときは下着のみ。もちろんブラも外す。ストーカー癖に露出癖・・・モノホンで変態だな。知っていたが、再確認。

「襲つてごめん」

小宇治君が頭を下げる。

いやいやそんなにするほどのものではございません。というかひと時とはいえ小宇治君とそういうことできただけで私死んでもいい！！つて感じなのに、頭を下げられるなど、滅相もございません。

「で、順番は逆になつてしまつたけど。

江崎さん、おれと付き合っていただけないでしょうか」

小宇治君が私を真剣な目で見つめてくる。

私はずっとずっと、もう5年も小宇治君が好きだった。すごく好きだった。付き合つてほしいといわれるのを夢見たこともあった。今だつて大好きだ。

でも・・・だから。

「お断りです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6897x/>

プリンスのお茶菓子

2011年10月23日12時03分発行